

第四節 昭島の村と農民の生活

一 平安時代の遺跡と交通

昭島市域の集落は縄文時代中期以来主として拝島段丘縁辺に営まれてきた。竜津寺東・大日堂・円福寺裏・階生園と連続している土師器・須恵器散布地は代表的なもので、多摩川を眼下に望む段丘上に位置する平安時代遺跡も多い。拝島段丘は中神町の熊野神社附近で終り、そこから東方は青柳段丘の縁辺が多摩川氾濫原に接し、段丘には、広福寺台・常楽院西遺跡が占地している。青柳段丘の遺跡は林ノ上遺跡南に接する林遺跡もそうで、土器散布は疎密であるが範囲は拝島段丘にまで及ぶ。

以上の段丘上の遺跡の外に、昭和五二年五月になって、中神町字東耕地において自然堤防上に平安時代遺跡が発見された。このため、昭島市域の平安時代の集落は七地域に分けて考えることができる。第一地域は林ノ上遺跡の南方に認められる林遺跡、第二地域は第三地域と連続している集落の可能性もあるが東西にのびすぎるので、竜津寺東と大日堂を含めて第二地域、第三地域は円福寺裏・階生園の拝島段丘縁辺、第四地域は昭和五一年七月と八月に発掘調査の行なわれた経塚下遺跡を中心とする宮沢町南部、第五地域は玉川小学校から広福寺台にかけての一带、第六地域は郷地町の常楽院（立川市）西遺跡で、立川市に一部かかった地域、さらに新発見の東耕地遺跡で、広福寺台遺跡の位置する段丘下西の自然堤防一帯を第七地域の集落として把えられる。

第一地域の集落から第七地域の集落まで、規模の大小の違いはあるが、ほぼ平安時代に営まれたものと見てよ



林遺跡出土の須恵器大甕（昭島市役所保管）

二 林遺跡

昭島市域の平安時代遺跡では最も西方に位置するとともに、最も内陸部でもある。立川段丘崖下に当り、その湧水による流れを中心に集落は営まれたものと思われる。縄文式土器や石器の散布は土師器・須恵器より顕著で、平安時代集落は小規模であったかも知れない。この遺跡から須恵器の完形大甕が秋山信雄氏の耕作によって発見されている。これによって、林遺跡の平安時代集落は九世紀後半から一〇世紀前半の時期に形成されたものと思われる。

林の集落は水田を全く所有せず、専ら畑地の耕作に従っていたと想像される。それは極めて短い期間であったかも知れない。そして、縄文時代早期以後居住地として不適であった地域へ、再び開発の手をのぼした最初の集落といえよう。この集落は第二地域あるいは第三地域の集落の分村であったかも知れない。集落間を結んだ道からはずれた地

い。これら集落の最短距離を結んでみると、「鎌倉街道」と一部でいわれている拝島段丘の縁辺にそった小路にかかることが分る。段丘縁辺の小路は縄文時代の道であったともいえる。この道は多摩川沿いに国府にまで達するものではなかったかと思われる。東耕地遺跡は道からはずれた位置にある。この遺跡が集落であったかどうか、今後の広範囲発掘調査の結果によらなければならぬであろうが、ここでは集落址として扱えようと思う。

域であることが、それを意味しているとも理解される。

三 竜津寺東・大日堂下遺跡

竜津寺東遺跡の東部から大日堂にかけての拝島段丘の縁辺に当る地域で、須恵器・土師器片が散布している。その散布範囲は一万平方メートルを越えるのではないかと思われ、昭島市域の集落では他の地域に匹敵する規模をもっているであろう。隣接の福生市でも平安時代集落は拝島段丘に営まれており、段丘縁にそって東西に走る道は、竜津寺東・大日堂下遺跡の集落をへて福生市に入り、さらに西上するものと推定される。

竜津寺東・大日堂下遺跡の平安時代遺跡は偶然の機会からも発掘されたことはなく、その状況は全く知られていない。

四 円福寺裏・偕生園遺跡

第二地域の集落と第三地域の円福寺裏・偕生園集落は、前述のように同一集落の可能性も強いが、国道十六号線（立川青梅線）沿いは住宅密集地で土器片分布状況が不明確であるため、土器片分布の濃密地を中心に二つの集落を想定した。遺跡は立川青梅線とそのバイパスを結ぶ道路の切通しをはさんで、偕生園の一部から円福寺裏にかけて展開し、切通し掘削の際には平安時代住居跡が破壊されたのではないかと思われる。面積は一万平方メートルを越え、段丘下の立川青梅線と段丘上のバイパスの間で、段丘の縁辺に当る。

採集される遺物は土師器・須恵器で、量的には土師器が多いようである。土師坏には切り離れたままの糸底が見ら

の集落でも、カマドは北壁に設けられているのを見ると、経塚下集落の人口が増加しはじめた頃に、拜島段丘の自然環境に変化が起ったのかも知れない。経塚下遺跡の集落は東カマドの時期をもって廃村となった。

経塚下遺跡から発見された遺物は豊富である。須恵器の坏・壙・甕・壺、土師器の甕・坏・壙、愛知県尾北窯址群中の篠岡窯址などで生産されたという灰釉陶器の壙・小瓶、鞠の羽口、風字硯、瓦、鉄製品の刀子・釘・鎌、鉄滓、砥石などが発見され、量的には須恵器が最も多い。

経塚下遺跡の集落は、人口が最高に達したカマドを東壁に設けた時期であっても、東国の集落としては決して大規模なものとは認められない。郷里の中心地では住居家屋が何百も数え、これらの点から経塚下遺跡の集落は郷里の中心とは思えない。風字硯があっても使用されなかったことや墨書土器のないことも、それを裏づけているといえよう。しかし、小規模集落ではありながら、野鍛冶の行なわれていたことは自給自足の態勢にあったことを意味しよう。大部分の食糧は集落の生産品であった。遺跡から発見された須恵器・土師器・灰釉陶器、また鉄の原料などは交易によって入手したものであつたらう。

六 玉川小学校・広福寺台遺跡

広福寺台遺跡は縄文中期・縄文後期・古墳前期・古墳末期・奈良平安時代の複合遺跡で、原始古代を通じてとりあげられてきた。広福寺台遺跡から発見される須恵器・土師器は坏破片が多く、平安時代に属するものと思われる。これらの土器片は台地の中央に多く、縄文式土器の分布地点と若干の違いを示している。台地突端には墓地があり、縄文時代遺構は確かめられているが、それ以後の時代の遺構は発見されていない。

玉川小学校校庭遺跡とよばれる地域は広福寺台の根元に当り、広福寺台遺跡とは連続している。校庭の東端に花壇を設けたとき、堅穴住居が発見された。なかから土師器甕が出土し、また附近からは土師器・須恵器の破片を採集することができる。平安時代の集落が形成されていたと推定される。運動場の造成や校舎建設の際の状況が不明なので、集落が校地全体に広がっているものかどうか分らない。しかし、土器散布の現状からすると、校地の東側から広福寺台にかけての広い範囲に、平安時代の集落が営まれていたことは間違いない。その面積は二万平方メートルに達するのではなからうか。

広福寺台は、昭島市域の単調な崖線からすると、わずかではあっても多摩川氾濫原に突出し、また第六地域の常楽院西遺跡の占地する台地も舌状を呈し、比較的複雑な地形といえる。広福寺台の東西両側には、入込んだ低地が形成されており、多摩川氾濫の被害は受けてもひどくはなかったのではないかと思われる。すなわち、玉川小学校・広福寺台遺跡の集落はこの低地に水田を営んでいたと推定される。広福寺台西の低地には最近発見の中神東耕地遺跡があり、集落形成が可能なほど水害は受けにくかったといえよう。古墳時代前期の人々が水田を営んだ場所でもあったろう。第五・第六・第七地域の集落はほとんど隣接しており、深い関係にあったと思われる。三地域の遺跡面積の合計は、第二・第三地域をはるかに越えるものである。昭島市域の平安時代集落の中心はこの地域にあったものではないか。多摩川上・中流域の左岸では、これだけの規模の遺跡を見出すことはむずかしい。

七 常楽院西遺跡

常楽院西遺跡のある郷地町字宅地続の台地は広福寺台と同様多摩川低地に突出し、遺跡はその東側に営まれてい